

No.	番号 #	動物種・系統・性	数/群	投与材料	投与方法	投与期間	投与量(mg)/飼料	投与量(mg)/体重/日	所見	LOAEL	NOAEL	年	指標	備考
	98	CD-1、雌	15	Halichondria okadaïから抽出したOA	背中 の皮膚に塗布	・DMBA 100 µg 単回塗布して1週間目から30週目まで		・1週間に2回OA(溶媒:アセトン)を10 µg	・OAのみの投与群では30週目に7.12-dimethylbenz(a)anthracene (DMBA)のみの投与群では8週目から、それぞれ1匹ずつ腫瘍が認められた。 ・DMBA及びOA投与群では5週目に、15匹中4匹に腫瘍が認められた。30週目に腫瘍が認められたマウスの割合は80であった。1匹当たりの平均腫瘍発生個数は2.6個であった。 ・発生した腫瘍の95～98%は良性のパピローム、2～5%が扁平上皮癌であった。 ・OA群の発がんメカニズムは、フォスファターゼ阻害によるリン酸化たん白質の蓄積によるものと考えられた。			1988		・DMBAは、c-Ha-ras遺伝子のコドン61(CAA⇒CTA)突然変異を起こす。 DMBA投与後OAを反復塗布し、生じた腫瘍の、c-Ha-ras遺伝子のコドン61も変異していた。
	175	CD-1、雌	15	Halichondria okadaïから抽出したOA	背中 の皮膚に塗布	・DMBA 100 µg 単回塗布して1週間目から30週目まで		・1週間に2回OA(溶媒:アセトン)を5 µg	・30週目に腫瘍を発生したマウスの割合は80.0%であった。1匹当たりの平均腫瘍発生個数は3.9個であった。			1991		
			15	Halichondria okadaïから抽出したDTX1	背中 の皮膚に塗布	・DMBA 100 µg 単回塗布して1週間目から30週目まで		・1週間に2回DTX1(溶媒:アセトン)を5 µg	・DTX1のみを塗布したマウスに明らかな腫瘍は認められなかった。(1匹のみ) ・30週目に腫瘍を発生したマウスの割合は86.7%であった。1匹当たりの平均腫瘍発生個数は4.6個であった。					
	366	SDラット、雄			経口投与	0.25 mg/LのOA(10 µg/ラット/日)を46週間、0.5 mg/LのOAを17週間。		・100 mg/LのMNNGを8週間飲水投与(～2 mg/日)し、インシエート。9週目から55週目まで0.25 mg/LのOA(10 µg/ラット/日)、56週目から72週目に0.5 mg/LのOA。 ・腺腫様過形成及び腺がんを合わせたものを腺胃の腫瘍性変化の指標とした。 ・OAのみの投与群に腫瘍形成は認められなかった。 ・72週目における腫瘍性形成変化は、MNNG及びOA群で12匹(75.0%)並びにMNNG群で13匹(46.4%)であった。 ・腫瘍性変性はラット一匹あたりそれぞれ1.1±0.9個及び0.6±0.8個であった。 ・OAは、MNNGによる発がん作用をプロモートする作用があると考えられた。			1992		・プロモーションのOA濃度が低いと思われたため、途中で濃度を上げた。 ・ラットにOAを胃内投与すると胃、小腸、大腸に浸出液が蓄積する。(関連文献: #103八並、藤木)	